

# 隨泉寺寺報

2003 年 2 月号

第 390 号

## 浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺 仏婦講座

講師 岡山県 浄福寺住職 山下義円師

### 講題 「命の不思議」

福井県の丸岡町というところで毎年【一筆啓上】という催しをしています。  
短い言葉の中に本質が潜んでいます。去年のテーマは【いのち】でした。  
その中から幾つか……。

【幾つもの命と繋ってるやん命って。繋がった命やから、失うと悲しいねんな。】

上古代 瞳 14 歳

【ひとつ。ひとつ。ひとつ。ひとつ。ひとつ。ひとつ。ひとつ。ひとつ。命。】

小林 俊輔 18 歳 高校 3 年生

そうです。私達は一人ではありません。また一人では生きて行けません。沢山の人と繋が  
りあって、生きているのです。私のきずかないところで多くの人々に支えられて、支え合っ  
て生きているのです。

【「いのち」の終りに三日下さい。母とひなかがり。貴男と観覧車に。子供達に茶碗蒸しを。】

下元 政代 51 歳 書塾

【「お前のために」って言葉が僕の命に責任をのせる。教えて、この命誰のなの？】

寺田 弘晃 17 歳 高校 2 年生

私の命は私のものであって、私だけのものではない。愛する多くの人のためのいのちで  
もある。

【どんなにキレイな音を奏でてでも、このいのちの鼓動にはかなわない。】

14 歳 中学 2 年生

【葬式の時空気が微妙にぬるい 人間と悲しさが空気に溶けている】

水野 綾香 14 歳 中学 2 年生

いのちそのものが尊い、美しい、悲しい……。

### 2月の法座予定

2月 2日午後6時より……本部役員会

2月 14日昼席午後1時より……仏婦講座

2月 14日夜席午後7時半より……出張法座 井原集会所

2月 15日朝席午前10時より……物故会員追悼法要 お齋があります

2月 15日昼席午後 1時より……仏婦講座

# 寒梅と臘梅（ろうばい）

## 寒梅

庭上一寒梅 笑侵風雪開 不爭又不力 自占百花魁

新島 襄

ていじょうの、いちかんばい わらって、ふうせつをおかしてひらく  
あらしそわず、また、つとめず おのずから、ひゃっかの、さきがけをしむ

花のない寒い冬の庭に、何よりも早く咲く寒梅は、さみしい庭に一番早く咲いてくれる春を告げるような花です。

梅は、中国からの渡来木です。中国では年が明けて最初に咲く花ということで、「百花初見」とか「百花元始」と呼びます。ですから、わが国では旧正月の頃、すなわち2月上旬から3月中旬が見頃ということになります。

臘梅（ろうばい）という植物を御存じですか？

初めて見た時には生花だとは思えませんでした。他の梅と同じく、葉に先立って花だけ先に開くせいもあるのでしょうか。細く乾いた枝に油紙で作ったような薄い花弁だけがぼちぼちとついているだけなんです。普通の梅の円い柔らかな花弁と違って先の尖ったぱりぱりした花弁は、植物らしい瑞々しさがまるで感じられませんでした。これが葉のひとつでもついていたればまた違った印象があるのでしょうかがそれもなく、人工的な匂いさえするような花でした。



雪が降るような寒い寒いこの時期、椿など、他にも咲く花はあれど香りを届ける花はそう多くありません。臘梅の艶やかな香りは、それこそ一面に広がります。馴染みの深い梅と(花の数などから)単純に比較しても、ひとつひとつの花が放つ香りはかなり強いので

しょう。寒梅でさえ暫(しば)し待たなければならないこの時期、庭に一本、臘梅があるだけで何か華やいだ気分させられます。

一般に、臘細工のようなつやと透明感を持った黄色い花弁から臘梅という名がつけられたといわれています(故に「蠟」の字が使われることもあります)が、異なる説も存在します。

12月の異称に臘月というものがあります。これは古代中国で臘祭という狩猟祭が行われる月であったことからきた名称(または日。臘日は大晦日の意)だといわれています。臘月または臘日は臘が変化したものです。その臘月(12月)に咲く花だから臘梅だという説もあります。

ですから12月に咲く事が多かったわけですが、近年は暖冬異変のせいなのか、一月に咲くことのほうが多いようです。私が随泉寺にきた22年前には報恩講でおまいりすると、何処のおうちでも、この臘梅をお仏壇にお供えしてありました。造花のようで奇異でしたが、見慣れると報恩講の花のような気がしていました。それが近年は12月に咲かないので、ほとんど報恩講におまいりしてもお供えしてあるお家がありません。何かお仏壇を見ても物足りないような気がします。一月に咲くからです。百花の魁(さきがけ)をしているわけです。

百花の魁(さきがけ)といえば梅ノ木です。

好文木(こうぶんぼく)という名称もあります。

この言葉はその昔、中国の皇帝が『文を好めば梅開き、学を廃すれば梅閉づる』と云ったことからつけられたようです。そういえば学問の神様で有名な菅原道真と梅も、とても縁が深いですね。学者肌の道真が都を追われる時に詠んだ歌は、その背景を合わせて考えると胸をうちます。一般的にこれは道真が庭の梅と離

れ難く、それを惜しんで詠んだとして思われ、飛梅伝説なるものもありますが、公には罪人とされなくても妻子を伴うことも許されない赴任。ましてや老境の身であれば(太宰府権帥に任ぜられた時、彼は既に50代も半ばでありました。当時としては高齢の部類に入るでしょう)都を遠く離れた九州への赴任とあっては長年連れ添った妻や愛しい子供とも、これが今生の別れかと思ったことでしょう。ですから私はこの歌を梅に仮託した家族、親しい人へ向けた歌だと考えます。そう思うとこの歌を単純に読むことはできません。魂を振り絞るような叫びに思えます。



東風吹かばにほひをこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ

御門徒のおうちに古い梅ノ木があります。おそらく樹齢二百年を超える老梅です。

私はこの梅ノ木が大好きです。老木ですし、傷んでもいるので花のつきは今一つですが、そこが又良いのです。幹は少し朽ちているようなところもあって、二、三年前に添え木をしてもらわれました。枝の半分は枯れてきて花も咲かないし、葉もつきません。その枝を切ったらと思いますが、又その枯れた枝が良いのです。まことにその枯れた枝が、全体のバランスをとっているのです。梅の花の白さに対して、その枝の黒さや苔むしたねずみ色が実にコントラストとなって、見事です。

全てのものに無駄なものは一つもありません。阿弥陀経に【青色青光 黄色黄光】とあります。それぞれがそれぞれの立場で働き光り輝くということです。

寒い冬を経て、百花の魁となる、気品というか けなげさを感じます。

梅が枝に きゐるうぐひす 春かけて 鳴けども今だ 雪は降りつつ 読人知らず

# 七草粥

早いものでもう二月になります。お正月はあっという間に過ぎてしまいました。一月の七日は七草粥です。せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ。お正月に雑煮やおせち料理で食べ過ぎたり、飲みすぎたおなかにとっては、七日には、おかゆぐらいで胃腸を休めるには、ちょうどいいのかもしれませんが。このごろスーパーでセットになったものを売っているので、わざわざ探す必要もなくなっています。「これはせり、これはナズナ」といって食べていたら娘がこれは何処にあるのかと問いました。「そこの道のほとりや川にあるよ」といったら「その辺の草なの、おなかが痛くなるんじゃない?」と聞きました。「大丈夫だよ、毒ではないから」といいましたが、ナズナはペンペン草ですし、ハコベラも普段はたべません。今食用にあるのは、せり、すずな(かぶ)、すずしろ(大根)ぐらいでしょう。

お釈迦さまのお弟子に蒼婆(ぎば)という名医がおりました。彼がまだ若いころ、「薬にならない草を採集してきなさい」と命じられ、幾日も野山を駆け巡って探しました。しかし薬にならない草は、とうとう一本も見つからなかったのです。

この世に「役に立たないもの」「薬にならないもの」は一つとしてないと知らせしめるのが「智慧」というものです。

吉川英治という著名な作家がおられました。氏が色紙などに好んで書かれた字句に「我以外者皆我師也」つまり私以外すべてのものは、私のよき師匠であり、よき導き手であるということです。氏はまさにすべてを拜んで行く人生を歩まれたのです。「善智識(ぜんちしき)にあうこと難し」とお聖教に仰せられます。この世に「善知識」といわれる「導き手」がおられないということはなくて、私の頭が高くて見失っているのです。ひとたび頭がさがりますといたるところに「善知識」がいてくださるのです。

身の周りから学ぶどころか、身の周りを常に憎まねばならないとしたら、こんな悲しいことはありません。今日の社会はまさに他を憎み、他を排除し、他を傷つける不幸が蔓延しています。

「信謗(しんぼう)共に因となして、往生浄土の縁を成ぜん」との親鸞聖人の仰せは「眞実信心」を恵まれると身の周りのすべてが「浄土の佛に育ち上がる」縁といただける「智慧」が恵まれるとのお示しであります。

「すべてのものに光がある」「すべてのものから学ばせてもらう」「この世には捨てものはない」……との心豊かな生き方が「信心の智慧」に生かされた人生であります。

## 御礼

門信徒会へ	金一封	馬場	一司殿	香典返しに返えて	
	金一封	神笠	邦夫殿	香典返しに返えて	
	金一封	井下	昭子殿	香典返しに返えて	
永代経懇志	壱拾萬円	馬場	一司殿	故馬場カツ子様	特別永代経志として
	貳拾萬円	井下	昭子殿	故井下 守様	特別永代経志として
	壱拾萬円	井下	昭子殿	故井下 薫様	特別永代経志として